

Title	16・17世紀におけるle語法の使用法および出現傾向
Author(s)	高橋, 瑛奈美
Citation	Estudios Hispánicos. 2023, 47, p. 105-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98070
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

16・17世紀における le 語法の使用法 および出現傾向¹

高橋 瑳奈美

1. はじめに

スペイン語には、本来3人称直接目的格の機能を果たす人称代名詞 *lo* の代わりに、同人称の間接目的格人称代名詞 *le* を直接目的語として用いる *le* 語法 (*leísmo*) がある。本研究は、同現象の使用法および同現象がみられる文脈の分析をおこない、同現象が出現しやすい文脈ならびに歴史の変遷を明らかにすることを目的としている。

le 語法の拡大はレコンキスタとそれに伴う再植民活動と関係していると考えられている。しかし、13世紀にはアンダルシアのほぼ全域が再征服されていたにもかかわらず、同地方にはこの現象はあまり普及せず、現在、同地方は非 *le* 語法圏とみなされている (RAE y ASALE 2005、Fernández-Ordóñez 2001)。ただし、Fernández Ramírez (1987) によると、*le* 語法圏の話者は必ず *le* 語法を用いるわけではなく、逆にアンダルシア地方など非 *le* 語法圏の話者が *le* 語法を用いることもあるため、同現象はたいへん複雑であるといえることができる。以上のことから、*le* 語法がみられないとされている非 *le* 語法圏の *le* 語法の例を考察することで、*le* 語法が出現しやすい文脈を知る手がかりになると考えられる。そこで本稿では、16、17世紀に焦点を当て、同時代に *le* 語法圏とアンダルシア地方の作者によって書かれた5つの文学作品を資料体とし、作品ごとおよび *le* 語法圏とアンダルシア地方における同現象の出現率と使用法を比較する。

1 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP 2138 の支援を受けたものである。

2. 非語源的用法の発展

まず、le 語法と同語法から派生した非語源的用法の発展を確認する。一般的に le 語法は、歴史を通じて指示対象が人の男性単数である場合にもっともよくみられるといわれている。また、le 語法から la 語法や lo 語法が派生して生じたといわれている。この事象の説明として Lapesa (2000: 298-299) は、le 語法と同語法から派生した語法の発生について、与格の指示対象は人であることが多いため、le、les は対格で用いられている場合であっても、指示対象は人であることが多いが、指示対象が女性や複数である場合、le 語法はあまりみられないとし、その要因は次に示すように性の区別と関係すると仮定している。ラテン語では男性単数対格は ILLUM、中性形は ILLUD で表されていたが、スペイン語では、両形態とも lo となった。この性の区別を回復させるために主格の人称代名詞 el(le)/ella/ello、および指示代名詞 este/esta/esto、ese/esa/eso、aquel(le)/aquella/aquello と同様に、男性形には le、女性形には la、中性形には lo を用いる範疇が確立された。そのため、le はほとんどの場合、男性形に用いられる。また、ロマンス諸語の中性形には複数がなく、los/las の対立が主格の人称代名詞 ellos/ellas、および指示代名詞 estos/estas、esos/esas、aquellos/aquellas と完全に一致するため、複数形の le 語法はあまりみられない。さらに、主格の人称代名詞および指示代名詞の複数形や nos、(v)os は対格でも与格でも同形であるため、las や、程度は低いが los が与格として用いられるようになったと述べている。したがって、人稱代名詞にも指示代名詞にもない格の区別が消失し、性の区別が強化されたとしている。

また、le 語法と同現象から派生した語法の拡大の過程を次のように述べている。まず、人、続いて物の対格として le が用いられるようになった。次に、la 語法が現れ、さらに複数形の lo 語法が現れた。最後に中性形の与格として lo が用いられるようになったとしている。

3. 歴史的変遷

ここでは、高橋 (2022) において明らかにされた中世における le 語法の使用率の変遷をみる。13 世紀の作品では、le 語法がもっともよくみられる

人の男性対格においてさえ、同用法の使用率は単数形でも複数形でも10%に満たなかったが、14世紀前半の作品では、人の男性単数対格における *le* 語法の使用率が *lo* の使用率にかなり近づいた。14世紀後半の作品では、語尾消失形 *l'* の使用の減少とともに *lo* の使用率が増えたが、同形が完全に姿を消した Jorge Manrique の “Poesía” では、人の男性単数対格における *le* の使用率が *lo* のそれをはじめて上回った。また、15世紀末の作品では、人の男性単数対格における同用法の使用率は80%以上になり、さらに “La Celestina” では物の男性単数対格において *le* の使用が約半数を占めた。つまり、*le* 語法は人の男性対格でみられるようになり、時代の流れとともに単数形において出現率が増加し、15世紀末にはかなり優勢になったことが確認できる。また、同時期にはその使用領域を拡大し、単数形では物の *le* 語法もみられるようになった。以上の事柄は先行研究で明らかにされていることとおおむね一致している (Lapesa 2000、Fernández-Ordóñez 2001)。

続いて、本稿で扱う16、17世紀における *le* 語法について Cuervo (1895: 103) は、*le* 語法は同時代においてマドリードとその周辺の州の作家において最盛期を迎えたと述べている。

4. 考察

4.1. 分析方法

本稿では16、17世紀に書かれた5つの文学作品を資料体とする。*le* 語法圏の資料体として3作品 (“Lazarillo de Tormes”、“La Galatea”、“La vida del Buscón”)、非 *le* 語法圏であるアンダルシア地方の資料体として2作品 (“Guzmán de Alfarache”の第一部と “El diablo cojuelo”) を取り扱う。これらの資料体は比較を容易にするために出生年の近い作者のものを選定した。たとえば、“La Galatea”の作者である Cervantes と “Guzmán de Alfarache”の作者である Mateo Alemán はともに1547年生まれである。また、“La vida del Buscón”の作者である Quevedo は1579年生まれであり、“El diablo cojuelo”の作者である Luis Vélez de Guevara は1580年生まれである。

データの分析方法としてはまず、資料体においてスペイン語の各弱形代名詞 (*le(s)*、*lo(s)*、*la(s)*) が目的語として用いられている例をすべて収集する。次に、その指示対象を分析する。*le* 語法圏の作品とアンダルシア地方の作品における *le* 語法の出現率を明示し、それぞれの地域で語源的または

非語源的に用いられている例を比較し、le 語法の出現しやすい文脈を考察する。

4.2. 各作品における le 語法の出現率

各作品における le 語法の割合を指示対象別に考察する。以下に示す表では年代順に le 語法圏出身の作者によって書かれた作品を左側、アンダルシア地方出身の作者によって書かれた作品を右側に示す。表では出生年の近い作者によって書かれた作品が横に並列されている。まず、人の男性単数形の割合を以下に示す。

(1) 人の男性単数形

le 語法圏の作品	le	lo	アンダルシア地方の作品	le	lo
Lazarillo de Tormes	89.2% (58/65)	10.8% (7/65)			
La Galatea	97.4% (305/313)	2.6% (8/313)	Guzman de Alfarache	25.2% (80/317)	74.8% (237/317)
La vida del Buscon	92.2% (118/128)	7.8% (10/128)	El diablo cojuelo	84.2% (48/57)	15.8% (9/57)

le 語法圏の3作品ではいずれも le 語法の出現率が9割前後である。しかし、アンダルシア地方の出身者の作品である“Guzmán de Alfarache”では出現率は25.2%であり、“La Galatea”と比べるとかなり低い。le 語法も用いられていることがわかる。また、“El diablo cojuelo”では le 語法の出現率が84.2%であり、le 語法圏のそれにかかなり近づいている。さらに、“Guzmán de Alfarache”に比べて le 語法の出現率がかなり高い。Luis Vélez de Guevara は Mateo Alemán よりも30年以上あとに生まれた人物であるが、16世紀末に生まれた世代の人々は非 le 語法出身者であっても le 語法を用いていたのか、Luis Vélez de Guevara が le 語法を好んで用いる人物であったのかを明らかにするためには、さらにデータを集め、考察する必要がある。

次に、動物の男性単数形を示す。

(2) 動物の男性単数形

le 語法圏の作品	le	lo	アンダルシア地方の作品	le	lo
Lazarillo de Tormes	0% (0/0)	0% (0/0)			
La Galatea	100% (3/3)	0% (0/3)	Guzman de Alfarche	0% (0/10)	100% (10/10)
La vida del Buscon	66.7% (4/6)	33.3% (2/6)	El diablo cojuelo	100% (3/3)	0% (0/3)

le 語法圏出身者の作品について、“Lazarillo de Tormes”には弱形代名詞が動物を指す例がないものの、同作品以外の他の作品では le 語法が優勢である。一方、アンダルシア地方出身者の作品について、“Guzmán de Alfarche”では10例中10例で語源を維持した形態 lo が用いられているが、“El diablo cojuelo”では3例中3例で le 語法が用いられている。

続いて、物の男性単数形の割合を観察する。

(3) 物の男性単数形

le 語法圏の作品	le	lo	アンダルシア地方の作品	le	lo
Lazarillo de Tormes	35.7% (15/42)	64.3% (27/42)			
La Galatea	85.1% (172/202)	14.9% (30/202)	Guzman de Alfarche	1.1% (3/275)	98.9% (272/275)
La vida del Buscon	69.5% (41/59)	30.5% (18/59)	El diablo cojuelo	48.3% (14/29)	51.7% (15/29)

le 語法圏の作品について、“Lazarillo de Tormes”の le 語法の出現率はあまり高くないが、時代が下って“La Galatea”および“La vida del Buscón”では高くなっている。一方、アンダルシア地方の作品について、“Guzmán de Alfarche”では le 語法の出現率はわずか1.1%であるが、“El diablo cojuelo”では半数近くを占めている。しかし、人の男性単数形では同作品と“La vida del Buscón”の le 語法の出現率との差は8%であったが、物の男性単数形ではその差が20%以上になっており、le 語法圏の作品に比べて物を指示する代名詞として le を用いることに対して抵抗が大きかったと考えられる。

次に、人の男性複数形の割合を示す。

(4) 人の男性複数形

le 語法圏の作品	les	los	アンダルシア地方の作品	les	los
Lazarillo de Tormes	7.7% (1/13)	92.3 (12/13)			
La Galatea	34.3% (34/99)	65.7% (65/99)	Guzman de Alfarache	6.3% (9/143)	93.7% (134/143)
La vida del Buscon	6.1% (3/49)	93.9% (46/49)	El diablo cojuelo	11.4% (4/35)	88.6% (31/35)

いずれの作品でも le 語法の出現率は高くないが、“La Galatea”では他の作品に比べると出現率は高い。また、人の男性複数形の le 語法の出現率はいずれの作品でも人の男性単数形のそれを下回っており、“Guzmán de Alfarache”以外の作品では物の男性単数形のそれをも下回っており、複数形では le 語法は浸透しづらかったと考えられる。

次に、動物の男性複数形の割合を示す。

(5) 動物の男性複数形

le 語法圏の作品	les	los	アンダルシア地方の作品	les	los
Lazarillo de Tormes	0% (0/1)	100% (1/1)			
La Galatea	0% (0/3)	100% (3/3)	Guzman de Alfarache	0% (0/6)	100% (6/6)
La vida del Buscon	0% (0/6)	100% (6/6)	El diablo cojuelo	0% (0/0)	100% (1/1)

いずれの作品でも弱形代名詞が動物を指す例がそもそも少ないが、le 語法が用いられている例は 1 例もみられない。

最後に、物の男性複数形の割合を示す。

(6) 物の男性複数形

le 語法圏の作品	les	los	アンダルシア地方の作品	les	los
Lazarillo de Tormes	0% (0/7)	100% (7/7)			
La Galatea	2.6% (2/76)	97.4% (74/76)	Guzman de Alfarache	0% (0/108)	100% (108/108)
La vida del Buscon	0% (0/45)	100% (45/45)	El diablo cojuelo	0% (0/22)	100% (22/22)

“La Galatea”で le 語法が用いられている例がわずか 2 例みられるのみであり、それ以外は動物の男性複数形同様、語源を維持した形態が用いられている。したがって、複数形では指示対象が人である場合、ある程度は le 語

法がみられるものの、人以外である場合、ほとんどみられないと考えられる。

各作品において、性の区別によって形態が選択されているかを確認するために、人の女性単数形の la 語法を以下に示す。

(7) 人の女性単数形（与格）

le 語法圏の作品	la	le	アンダルシア地方の作品	la	le
Lazarillo de Tormes	0% (0/5)	100% (5/5)			
La Galatea	8.6% (14/162)	91.4% (148/162)	Guzman de Alfarache	4.9% (9/184)	95.1% (175/184)
La vida del Buscon	73.3% (22/30)	26.7% (8/30)	El diablo cojuelo	14.8% (4/27)	85.2% (23/27)

“La vida del Buscón” の la 語法の割合は他の作品と比べ、とても高い。Lapesa (2000) もまた、Cervantes や Lope de Vega の作品では la 語法はあまりみられないが、Quevedo や Calderón のようなマドリード出身の次の世代の作家において la 語法がよくみられると指摘している。また、表では示していないが“La vida del Buscón”では複数形の la 語法も 30 例中 14 例みられる。このことから、la 語法でも複数形は単数形よりも拡大するのが困難であったと考えられる。一方、“El diablo cojuelo”では le 語法の例は多くみられるものの、la 語法の例は少ない。つまり、“La vida del Buscón”では、格の区別よりも性の区別を重視した体系が用いられているのに対し、“El diablo cojuelo”では非語源的語法がみられるのは le 語法のみである。したがって、両作品はほぼ同時期に生まれた作者によって書かれたものの、両作品で用いられている体系は異なる、つまり、当時それぞれの地域において非語源的語法の進展度合には差があったと考えられる。

また、“La vida del Buscón”における複数形の lo 語法は 67 例中 4 例のみであり、まだあまり lo 語法は浸透していなかったといえる。

4.3. 事例

ここでは、人の男性単数において le 語法が出現しやすい文脈を考察する。まず、同指示対象において le 語法がかなり高い割合でみられる le 語法圏出身者の作品において le 語法と語源を維持した形態 lo が区別して用いられているかを観察する。次に、アンダルシア地方出身者の作品における le 語法

が出現しやすい文脈および出現しにくい文脈の考察をおこなうが、動詞の他動詞性の強弱による違いを排除するために、同一作品のなかで同じ動詞で *le* 語法が用いられている例と語源的形態 *lo* が用いられている例を取り扱う。

4.3.1. *le* 語法圏出身者の作品における *le* 語法

le 語法圏出身者の作品では *le* と *lo* が区別して用いられているかを観察するために、まず *le* と *lo* が使い分けられていると考えられる例を確認する。たとえば、“*Lazarillo de Tormes*” では同じ指示対象 *mi amo* に対し、*le* と *lo* の交替が第一章の末でみられる。この場面は、*mi amo* からひどい扱いを受けた *Lázaro* が彼と縁を切ることを試みる場面である。

- (1) Yo que vi el aparejo a mi deseo, saquele de bajo de los portales y lleve lo derecho de un pilar o poste de piedra que en la plaza estaba, [...] (*Lazarillo de Tormes*, I, 25, 8-10)²

『あたしは、うまくいった、しめしめと、やつを拱廊から連れ出し、広場の周りに立っている石の柱のほうへ向かいました。』(岡村, 2018, 41)

- (2) Y déjole en poder de mucha gente que lo había ido a socorrer y tomo la puerta de la villa en los pies de un trate, [...] (*Lazarillo de Tormes*, I, 26, 3-4)

『やつを助けようと大勢集まってきておりましてんで、あとはその連中に任せ、急いで町の門を出ました。』(岡村, 2018, 42)

縁を切ろうと考えるこの場面まで、*mi amo* の直接目的語には常に *le* が用いられてきているが、この場面では同じ文中であるにもかかわらず、*le* と *lo* の交替がみられる。つまり、指示対象を *lo* で示すことによって、ひどい仕打ちを受け、縁を切りたいと思っている相手である *mi amo* に対する軽蔑を示唆したものである可能性がある。高橋 (2022) でもまた、*le* 語法圏の作品では軽蔑の対象に対する *lo* の使用が多くみられることが確認されている。

次に、“*La Galatea*” の例を観察する。以下にあげる例では *le* と *lo* がほぼ同じ文脈で用いられている。

2 斜体と四角囲みは筆者による。以下の例でも同様である。

- (3) Merece quien en el suelo
en su pecho a amor no encierra,
que **lo** desechen del cielo
y no le sufra la tierra. (*La Galatea*, I, 72, 1-4)

『この世にて愛を
抱かざる人間どもは
天国を追い落とされよ
地上でもはねつけられよ』(本田, 2017, 91-92)

- (4) Y merece el que su celo
de tal amor le destierra,
que *le* desechen del cielo
y no le acoja la tierra. (*La Galatea*, I, 73, 9-12)

『その愛の熱意を捨てる
者どもはさてはせいぜい
《天国を追い落とされよ
地上でもはねのけられよ》』(本田, 2017, 92)

lo と *le* の指示対象はそれぞれ *quien*、*el que* であるという違いもある。しかし、(3) の 4 行目では同じ指示対象 *quien* に対し、*le* が用いられている。したがって、16 世紀後半に書かれた作品でも使用の揺れがある可能性を指摘することができる。ただし、(3) の 4 行目で直接目的語として *le* が用いられている要因は、高橋 (2022) で *le* 語法を促す要因として挙げられていたように主語が物であることによる可能性もある。以上のように、*le* と *lo* の交替が何らかの意味を含んでいると考えられる例がある一方で、*le* と *lo* がほぼ同じ文脈で交替している例もみられる。

4.3.2. アンダルシア地方出身者の作品における *le* 語法

4.3.2.1. 「助ける」を意味する動詞の直接目的語

高橋 (2022) において *ayudar* など「助ける」を意味する動詞の直接目的語には単数形でも複数形でも 13 世紀の作品からすでに *le* (s) が用いられていたことが確認されたが、“*Guzmán de Alfarache*” でも単数形 4 例、複数形 2 例の全 6 例で *le* (s) が用いられている。単数形と複数形の例を 1 例ずつ

次に示す。

- (5) Ayudele a todo, entregándoles las frentes y orejas. (*Guzmán de Alfarache*, 98, 4)

『ロバの額と耳をこすってやることによってすべての事物で彼を手伝いました。』

- (6) Demás que no se expenden ya las haciendas con los virtuosos, antes con otros tales que les ayudan a pecar, [...] (*Guzmán de Alfarache*, 82, 19-21)

『さらに、美德のある人々ではなく、むしろ彼らが罪を犯すのを助けるような他の人たちで財産は費やされるからです』

4.3.2.2. le 語法を促す要因がある文脈

高橋 (2022) において、le 語法を促していると考えられる要因が複数観察され、14 世紀前半の作品ではこのような要因がある場合に le 語法がよくみられることが確認されたが、アンダルシア地方の作品でも同じことがいえると考えられる。同地方の作品において 14 世紀前半の作品と共通して le 語法を促していると考えられる要因を以下に示す。

4.3.2.2.1. 主語が非行為者

高橋 (2022) では主語が非行為者である場合、le 語法が出現しやすいことが確認された。“*Guzmán de Alfarache*” には、動詞が同じであっても、主語が非行為者、つまり物である場合、直接目的語には le が用いられ、主語が人である場合には lo が用いられている例が同作品に複数みられる。その例を次に示す。

- (7) Creyeron todos quedaba mal herido, mas defendiole el almete no haberle hecho gran daño. (*Guzmán de Alfarache*, I-I-VIII, 145, 22-23)

『彼らは皆、彼がひどい怪我をしたと思ったが、兜が彼を守り、彼は大怪我をしなかった。』

- (8) Aconteció que, como una vez echase su enemigo mano para él, su criado

lo defendió con pérdida del contrario, que lo retiró en cuanto su señor se puso en salvo : (*Guzmán de Alfarache*, 203, 21-23)

『敵が彼を捕らえると、彼の使用人は敵に損失を与え、主人を守り、敵は主人が無事になるとすぐに彼を撤退させた。』

両例とも動詞は *defender* であるが、(7) では主語が *el almete*、つまり物であるのに対し、(8) では主語は明示されていないが、訴訟を求められた人つまり、物ではなく、人である。(7)、(8) の直接目的語はそれぞれ *le*、*lo* である。つまり、主語が人であるか物であるかによって直接目的語の形態が異なっている。同作品には *defender* の直接目的語に *lo* が用いられている例が他に 2 例あるが、主語はいずれも人である。

4.3.2.2.2. 未実現の事柄と通常起こる事柄

高橋 (2022) でみられた *le* 語法を促す要因で、“*Guzmán de Alfarache*” でも *le* 語法を誘発していると考えられる要因をもうひとつ提示するが、それは未実現の事柄を表している文脈である。以下の例のうち、*le* が用いられている例では直接目的語の動詞の行為はまだ実現されていないが、*lo* が用いられている例では直接目的語の動詞の行為は通常よく起こる事柄を表している。

(9) Comunicolo a Scintila y, rogándole que *le* favoreciese, le dijo : (*Gúzman de Alfarache*, 332, 7-8)

『彼はこれをシンティラに伝え、彼女に彼に味方するよう懇願し、彼女に言った。』

(10) Todos lo tropellan y ninguno lo favorece. (*Gúzman de Alfarache*, 251, 23)

『皆が彼を不当に扱い、誰も彼に味方しません。』

以上のことから、14 世紀前半の作品と “*Guzmán de Alfarache*” には *le* 語法の使用における共通性があると考えられる。また、*le* 語法の出現率もほぼ同じである。つまり、17 世紀の非 *le* 語法圏とそれよりも約 300 年前の *le* 語法圏では *le* 語法が出現しやすい文脈および出現率は似通っていると考

られる。ただし、このことを確認するにはさらに多くのデータを収集する必要がある。

4.3.3. le 語法が出現しにくい文脈

Flores (2004) は、人の男性単数における le 語法の割合が 94% である “La Celestina” でも直接目的語の指示対象である人物が物のように扱われている例では語源を維持した lo が用いられていると指摘している。4.2. で確認されたように、アンダルシア地方出身者の作品である “El diablo cojuelo” でもまた、人の男性単数の le 語法の割合はかなり高いが、他動詞性が強い、すなわち直接目的語の指示対象である人物が物のように扱われている場合に lo が用いられている例がみられる。

- (11) —El Príncipe Nuestro Señor —dijo don Cleofás—, que pienso que le crió Dios en la turquesa de los ángeles. (*El diablo cojuelo*, 204, 16-17)

『私たちの主の王子です。』とドン・クレオファスは言った。「神が彼を天使の型に入れて育てたと思います。』

- (12) [...], que tiene talle de comérselo antes que criá[lo], [...] (*El diablo cojuelo*, 102, 1-2)

『(隣に住む男は) 彼を育てるというよりもむしろ彼を食べてしまおうとしています。』

両例の動詞はともに criar であるが、直接目的語は (11) では le、(12) では lo で表されている。(11) では le で表された人物は人として扱われている。一方、(12) の lo の指示対象は直前の comérselo の lo の指示対象と同じ un niño である。つまり、un niño は人ではあるものの、同時に食べられる対象であり、物のように扱われている。

5. 結論

本稿で観察した例から、le 語法圏では中世に引き続き、16、17 世紀でも男性単数対格として le が主に用いられていることがわかった。ただし、語源的形態 lo は完全に姿を消したわけではなく、le との区別が意識して用い

られている例も観察される一方で、同一作者による作品であっても le と lo が使い分けられていないと考えられる例もみられる。また、17世紀末に書かれた作品では la 語法も十分にみられるようになっている。

そして、アンダルシア地方では、le 語法がみられないわけではなく、“El diablo cojuelo”では指示対象が人の男性単数である場合、かなり高い割合で le 語法がみられる。

さらに、le 語法圏出身者とアンダルシア地方出身者の作品における弱形代名詞の使用法を比べた結果、作品の作者が生まれたのがほぼ同年であっても、le 語法圏とアンダルシア地方では非語源的用法の出現率は異なり、同用法の進展状況には違いがあるのではないかと考えることができる。しかし、両地域において le 語法がまだ十分に浸透していなかった時代と le 語法が十分に浸透していた時代の例を考察した結果、両地域で同現象が出現しやすい文脈および出現しにくいのは一致していることがわかった。つまり、le 語法圏とアンダルシア地方では le 語法の拡大につながった要因が完全に異なるのではなく、共通または類似の要因を基盤として拡大し、le 語法が出現しにくい文脈では le 語法が十分に発展したあとでも lo が使われ続けたと考えられる。

今後の課題として、16、17世紀の作品からさらにデータを収集し、より考察を深めるとともに、18世紀以降、le 語法がそれぞれの地域においてどのように変遷していったのかを観察したい。

参考文献

- Cuervo, Rufino José (1895) : “Los casos enclíticos y proclíticos del pronombre de tercera persona en castellano”, *Romania*, n° 93, Tomo 24. págs.95-113. [en línea] https://www.persee.fr/doc/roma_0035-8029_1895_num_24_94_5877 [最終アクセス日 2022年10月16日]
- Fernández-Ordóñez, Inés (2001) : “Hacia una dialectología histórica reflexiones sobre la historia del leísmo, el laísmo y el loísmo”, *Boletín de la Real Academia Española*, Tomo 81, Cuaderno 284. Real Academia Española (以下 RAE と 略). págs.389-464. [en línea] http://uam.es/personal_pdi/filoyletras/ifo/publicaciones/8_a.pdf [最終アクセス日 2022年10月13日]
- Fernández Ramírez, Salvador (1987) : *Gramática española. 3.2. El pronombre* [1951], volumen preparado por José Polo, Madrid, Arco/Libros.

- Flores Cervantes, Marcela (2004) : “Transitividad y valoraciones pragmáticas en los procesos del leísmo, el laísmo, el loísmo”, *Signo y seña*, nº13, Universidad de Buenos Aires. págs.137-184. [en línea] <https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=6914212> [最終アクセス日 2021年8月27日]
- García Godoy, M.^a Teresa (2002) : “Notas sobre el leísmo en la historia del español de Andalucía (s. XVIII)”, en M.^a Teresa Echenique Elizondo (ed.), *Actas del V Congreso Internacional de Historia de la Lengua Española*, Madrid, Gredos, págs.645-655.
- Lapesa, Rafael (2000) : “Sobre los orígenes y evolución del leísmo, laísmo y loísmo”, en Cano Aguilar, Rafael. y Echenique Elizondo, M.^a Teresa (ed.), *Estudios de morfosintaxis histórica del español*, Madrid, Gredos. t.1, págs.279-310.
- RAE y Asociación de Academias de la Lengua Española (2005) : *Diccionario Panhispánico de dudas*, Madrid, Santillana.
- 佐竹謙一 (2009) 『スペイン文学史』 研究社.
- 高橋瑳奈美 (2022) 「中世スペイン語における le 語法の変遷と出現傾向」 大阪大学修士論文.

辞書

- Autoridades = Real Academia Española (1726-1739) “Diccionario de Autoridades”, [en línea] <https://apps2.rae.es/DA.html> [最終アクセス日 2023年1月16日]

資料体

- Fernández, Angel R./Arellano, Ignacio (ed.) (1988), *El Diablo cojuelo*, Madrid, Castalia.
- RAE (2012), *Guzmán de Alfarache*, Barcelona, Galaxia Gutenberg. [アレマン (1991) 『バロックの箱』 (牛島信明訳)、筑摩書房]
- . (ed.) (2014), *La Galatea*, Barcelona, Galaxia Gutenberg. [ミゲル・デ・セルバンテス (2017) 『セルバンテス全集①ガラテア』 (本田誠二訳)、水声社]
- . (ed.) (2016), *La vida del Buscón*, Madrid, Espasa Calpe, [ケベード (1986) 『世界文学全集3 大悪党』 (桑名一博訳)、綜合社、フランシスコ・デ・ケベード (1997) 『ピカレスク小説名作選』 (竹村文彦訳)、国書刊行会]
- . (ed.) (2016), *Lazarillo de Tormes*, Madrid, Espasa Calpe. [(1997) 『ピカレスク小説名作選』 (牛島信明訳)、国書刊行会、(2018) 『ラサリーリョ・デ・トルメスの人生』 (岡村一訳)、水声社]